

〈注〉

- (1) 映画「五朵金花」など。
- (2) その後、全国少数民族文学創作獲獎叢書「電影戲劇文学集」人民文学出版社1983に収録された。
- (3) 楊明「白族吹吹腔伝統与源流初探」『大理文化』1979. 4
- (4) 楊明「白劇」雲南省戲劇創作研究室『雲南戲曲曲芸概況』雲南人民出版社1980
- (5) 村松一弥『中国の少数民族』毎日新聞社1973
- (6) (7) (10) 『中国少数民族』人民出版社1981
- (8) ただし、密教関係からの虚構の可能性ありとして、白子国の存在を疑う説もある。趙櫓『論白族神話与密教』中国民間文芸出版社1983
- (9) 同前
- (11) 牧田英二「雲南少数民族の作家と作品」『雲南の民族文化』研文出版1983
- (12) 『白族民間故事』雲南人民出版社1982附録。
- (13) 木川洋子「阿詩瑪」にみる採集と整理の問題」『中国民話の会会報』Ⅲ—2号1974。
- (14) 李星華著、君島久子訳『中国少数民族の昔話——白族民間故事伝説集』三弥井書店1980。
- (15) 「建国以来“望夫雲”的整理創作簡況」『大理文化』1979. 4
- (16) 前出
- (17) 前掲書(14)
- (18) 徐喜瑞『望夫雲——一個美麗古老的伝説』あとがき、中国青年出版社1957
- (19) 『望夫雲長詩集錦』雲南人民出版社1981
- (20) 張文勛等『白族文学史』修訂版、雲南人民出版社1983
- (21) 『山茶』1981. 4
- (22) 前出(8)
- (23) 中国には全国で55の少数民族がいるが、雲南には正式に認められただけでも、22の少数民族がいる。

◎ 表 I、III章および注に掲げた以外の参考文献

- ① 趙櫓「《望夫雲》神話弁析」『山茶』1982. 2
- ② 趙櫓「論觀音神話」『山茶』1983. 2
- ③ 民毅「喜看“望夫雲”」『民族団結』1981. 1
- ④ 張泉「白族」『雲南群衆文芸』1980. 6
- ⑤ 陶陽・亮才「談白劇“望夫雲”的改編及其它」『山茶』1981. 2
- ⑥ 服民「漫談白族神話故事」『大理文化』1980. 4
- ⑦ 李續緒「白族的龍神和“本主”神話」『山茶』1983. 3
- ⑧ 蕭兵「論殺人祭神、人神恋愛」『社会科学輯刊』1979. 5
- ⑨ 王明達・何真「論仏教文学对白族觀音故事的積極影響」『山茶』1982. 4
- ⑩ 尤中編『中国西南の古代民族』雲南人民出版社1979
- ⑪ 雲南省歴史研究所編著『雲南少数民族』雲南人民出版社1980
- ⑫ 千田九一・村松一弥編『少数民族文学集』中国現代文学選集20、平凡社1963

研究では、日本も含めた他民族の伝承の中に、このタイプの話を見つけることができなかった。ペー族居住地の風土、自然と密接に結びついたこの話は、すこぶる民族精神に富むものと言えよう。一塊の雲にかくも衰切な、しかし壮大なドラマを見たペー族の人びとの、その豊かな想像力と気概に感嘆する。

ところで、今回はほとんど、「中国での研究サイドから、ペー族社会における“望夫雲”の位置づけを考える」というアプローチの仕方に留まってしまった。しかし、ペー族が、民族のるつぼといわれる雲南⁽²⁾を中心に自らの歴史と居住空間を作り上げてきたことを考えるとき、そして学問的にも当然のことながら、今回の縦系的考察の上に、横系的探求が織り成されなければならないと思う。つまり漢民族も含めた周辺の民族、さらには日本や諸外国の各民族の伝承の検討が必要だ。それによりまた新しい方向が開け、別の位置づけが可能になろう。例えば「仏教伝播とそれに伴う諸民族の伝承の変化」というテーマひとつをとっても、様々の事例が予測される。また世界各地の風物に係わる伝説、中でも“精气化物”に関連のあるものだけを拾っても、何かが浮び上がってくるかもしれない。すべて今後の課題とする。

「望夫雲」神話そのものの成り立ちに関して言えば、蒼山玉局峰の雪と洱海の石ということから、まず、死後の魂の存在に対する信仰すなわち祖先崇拜と、万物に霊ありとする自然崇拜から導かれる“精気化物”(たましいが物に化す)という考えが根底にあると考えられる。また『南詔野史』によると、当時、蒼山の神が南詔王の娘をさらって行き、インドから来た高僧に法術をもって脅されたという。後半は密教側の意図が見えすいているが、前半は“人神相恋”(神が人間に懸想する話)である。これらには、楚(現在の湖北・湖南、とくに湖北)に伝わっていた巫山神女の話(死体化生と人神相恋の要素をもつ)の影響がうかがえる。その根拠としては、①昆明文化は、楚の文化の影響を受けている。②かつて、牧畜民的原始シャマニズムを信仰する氐羌族群の南下と、楚の巫風をもった夔濮族群の西遷が行なわれたことなどがあげられる。

これらの素地の上に、密教側からの粉飾、すなわち羅荃法師に敗れる話がつけ加えられた。『大理府誌』に「悪い龍は観音に退治されたが、その仲間が東山の海岸の洞窟に住んで、風や波を起しては船を覆したりする。高僧が東崖に羅荃寺を作り、これを制圧した」とあるように、羅荃寺は、ペー族固有信仰に対峙する、密教側の根拠地であった。

Ⅲにあげた古い「望夫雲」説話のうち、①にはない石ロバの話が②につけ加えられているのは、密教神話化したペー族民話の、密教の衰退に伴う、再度のペー族化ではないだろうか。すなわち、きこりが石ロバに変わるのは、ひとつには“精気化物”であり、もうひとつは、堅固な愛情の依り所として、ペー族の抵抗精神、勝利に対する楽観的戦闘心の不巧の形象化なのである。

多少の考え違いや漏れがあるかもしれないが、以上が趙櫓の「望夫雲」考の概要である。筆者にはその可否を云々する力はないが、仏教と“本主”信仰の混在する現況を考えると、かなりの説得力をもつように思われる。論の中にあるように、密教化の必要性が薄れた時、神話は再びペー族の民族魂、感情で洗い直された。それは1つの時代要請でもあったのだろうか。

それなら、この話の今日的意味は何であろうか。言葉をかえて言うなら、現代という時代が要請するものは何なのだろうか。答はとうに出ているのかもしれない。それは労働する人民の、圧迫者への不屈の抵抗精神と、最後の勝利への飽くなき楽観主義だ。主人公はもはや不思議な力をもった“怪”などではありえず、森に働く若者だ。それも、きこりより狩人の方がより戦闘的にみえる。共に出奔する相手は王女でも石工の娘でもかまわない。当人が階級的な対立者に対して、断固闘かう意思があればよいのだ。ちなみに、モチーフのa、bは古い話には見られず、このことは趙櫓の“人神相愛”説を裏づけるように思える。こうした考え方からすれば、表Ⅱの場合、男自身に神的要素があり、男女の意思確認もしくはその場が不明確な類話①②の方が、他の2話より古いとも考えられる。周囲の状況から考えて、所収本の出版年月の新しいことが、採集時期のそれと必ずしも一致しないので、断定は許されないが。そして、主人公二人を圧迫する者は、今の時代に否定されるべき存在、すなわち王や領主など支配者であり、宗教者も当初の位置づけはともかく、現代では同列に並ぶのである。

こう考えてくると、最後に残るのは、ある条件の下に蒼山上に必ず立ち現われる雲と、それに付随して起る風、その風が波を吹きあげて露にする洱海中の石などだ。筆者の限られた範囲の

冬になるたび、蒼山と洱海の間をそぞろ歩いていけば、蒼山の玉局峰上に、ひとかたまりの雲が見えるだろう。その雲はいろいろな色が入り混り、変幻きわまりなくさまざまな形に変わる。ある時は白波が滔々と天から降るようであり、ある時は五色の錦が翠の山に掛っているようだ。またある時は古風な衣裳をまとったペー族の娘が山頂に立って、体を起したり下げたり、さながら何かを探す様に似ている。時には、空中の白馬が紺青色の大空を駆けめぐらるよう。その様子たるや、時によってさめざめと泣いているようでもあり、怒り叫んでいるようでもある……これぞ世に言う、かの有名な“望夫雲”だ。(19)

いずれにせよ、さながら生ある者のごとく、感情ある者のごとく、うち眺める人びとの心に訴えかけてくるところがあり、それが「帰らぬ夫を待つ妻」として結晶されたものであろう。

蒼山があり、洱海があり、決まって起こる雲がある。こうした永遠の、目に見える風物に関する民話として、「望夫雲」の話は一般に「風物伝説」の範疇に組み入れられる。表Iの所収本1・9・11などはこれを採り、先にあげた趙懐仁の評論もこれに近い。

これに対し、ストーリーから読み込んでいけば「愛情故事伝説」(愛情ばなし)である。『白族文学史』(20) 暁雪『『白族民間故事選』序』(21)などはこの面を強調する。ただし、この場合単純な恋物語とされることは少なく、主人公たちの愛を妨げ、圧迫する者が権力者であることから、階級対立や社会的矛盾をも含めた、“自由な幸福を求めるための闘争”として捉えられる。堅固な愛情と不屈の抵抗精神は、あり方として常に1セットなのだ。

一方、民話を重層的にとらえ、歴史的に分析する方法もある。表IIにしても、原話の採集地点、時期などがもう少し明確ならば、(理想的には類話数も多ければ)何か読みとれることがあると思うのだが、やはり臆する。幸い、散文作家で民間文学研究者の趙楷氏(ペー族)に、「ペー族神話と密教を論ず」(22)その他二、三の論文があるので、紹介してみたい。氏はペー族の神話を密教との関係で捉え、「望夫雲」についてもかなりの紙面を費やしている。実はこれらの論が発表される以前、筆者は「望夫雲」の後日譚とも言うべき「望夫雲と下関の風」に観音が登場するのに注目し、仏教との関係を予想していたので、趙氏の論文は非常に興味深く読んだ。それらによると：

大理地方への密教の伝来は、八世紀中葉南詔国の時代に、チベット(吐蕃)経由で行なわれた。しかし、ペー族の間には、元来アニミズムを基調とするシャマニズム(巫教)と、それと密接に結びついた“本主”信仰があったため、容易に浸透していかなかった。そのため密教の側から様々の働きかけがなされた。民間伝承に関して言えば、白子国の王は古代インドのアショカ王の末裔であるという神話が作られたり、観音神話や龍退治の神話のように、元来大理地方にあった治水・洪水説話が、仏教者の行った奇跡話にすり替えられたりしてしまった。それはまた、たとえば南詔王勸豊祐(在位824—859)のように、本人も母も妻も仏教徒になるといったような、支配階級との結びつきを伴って、在来の巫教信仰との二重構造を作ってきた。しかし、大理が元に統一されるに及び、中原から禅宗が入って来て、密教および密教者のあり様に変化が表われた。上述のような様々の変容を経てきた密教神話(元来はペー族もしくは大理地方の神話)は密教の衰退に伴い、ふたたびペー族化された。「望夫雲」の話はまさにこのような状況の下で、現在に近い形を作り上げるに到ったのである。

これを補足するものとして、筆者の日にすることのできた類話について、いくつかの項目を対照表にしてみた。

表II 類話対照

表Iによる 類話仮番号、備考	項 目		男	女	出 合 い	飛ぶ力の 由 来	寒さの原因	雲の起る 時 期
		採集期						
① 李星華	1957	きこり (樵郎)	南詔王女 (阿娃)	散歩途中 (鳳凰橋)	もともと仙人的、王女を背負って逃げる途中、自然に	大雪	冬 12 月	
② 李星華	1957	きこり (砍柴人)	南詔王女	男、鼠になって宮中に入りこむ	もともと魔術にたける	洞窟の寒さ	陰曆 12 月	
⑥ 楊美清	?	獵 師 (獵 人)	石工の娘 (後に南詔王に見そめられて宮中へ)	繞 三 雲	狩獵の神	法師の術	秋 冬	
⑯ 楊慶文	?	獵 師 (獵 人)	南詔王女	繞 三 靈	白髪老人(山の神)から与えられた桃の実	法師の術	十冬臘月	
重印大理府志	明	貧 者	南詔王女		蒼 山 神			
大理県志稿	清末民初	怪	宮 中 女			高 氣 冷	冬	
③ 郝盛涛	1957	“白馬將軍”と呼ばれる山に住む若者	王 女	かささぎの通 報	もともと風に乗って、飛べる			

ところで、雲の立ち昇る時期については諸説があり、趙懷仁「白族神話伝説芸術特点初探」(16)や『辞海民族分冊』1982では8、9月、毛星「白族の風俗と歴史的背景」(17)では陰曆11月12日とする。気象学や地理学から見たら、これも含めて明確な説明ができるのだろうが、いったいどのような雲なのか、今は実際見たであろう人たちの言葉を借りるにとどめる。まず、徐嘉瑞によると：

「望夫雲」の現われるのはたいてい冬か春だ。現われる場所は玉局峰のうしろ側で、単独の雲だ。出てきたばかりの時は白いが、やがて黒くなることもある。時によっては乱れた髪のようにも見える。その雲は洱海の上で急上昇したかと思うと、突然また降りてくる。すると洱海に大風が起り、大小の船は急いで岸に寄らざるをえない。言い伝えに、湖の水を吹き払って、石のロバが見えるまで、風はやまないと言うが、今でもそのとおりである。(18)

また筆者らの大理訪問の際、昆明、大理の全行程に随行の労をとられた民間文学研究者の李績緒氏(ペー族)はこう語る：

な作者をあげてみる。以下は、張錫禄（ペー族）「建国以来の『望夫雲』整理創作のあらまし」(15)で言及された事例に、筆者の気づいた例を補ったものである。

1. 長篇詩

- (1) 魯凝……『望夫雲』雲南出版社1956. のちに『望夫雲長詩集錦』以下『集錦』と省略。雲南人民出版社1981に再収。
- (2) 公劉……『望夫雲』中国青年出版社1957のちに『集錦』に再収。
- (3) 徐嘉瑞『望夫雲……一個美麗古老的伝説』中国青年出版社1957. のちに『集錦』に再収。
- (4) 楊美清『火把節』作家出版社1958. 英訳……『Chinese Literature』1959. 8所収。のちに『集錦』再収。
- (5) 徐遲……『集錦』所収。

このうち、(1)は「山歌」(民謡)形式を導入。(5)は、女主人公の独自の形をとる。

2. 短篇詩

郭沫若、徐遲、曉雪、周良沛、鄭江濤など。

3. 脚本

- (1) 楊明：滇劇用。中国戯劇家協会雲南省文化局。1962。
- (2) 徐嘉瑞：五幕歌劇用、鄭律成作曲、中国戯劇出版社1963。
- (3) 徐嘉瑞、鄭律成：五幕八場歌劇用。百花文芸出版社1959。
- (4) 公劉、林子等：映画シナリオ。『中国電影』1959. 1所収、『延河』1960.(号数不明)
- (5) 楊明、陳興、張繼成：白劇用。1979年作。「電影戯劇文学集」全国少数民族文学創作獲獎作品叢書、人民文学出版社所収

4. その他

- (1) 文化大革命(1966—76)以前に、上海文化出版社から『望夫雲』という単行本が出版されているが、詳細は不明。
- (2) 土弩「望夫雲」(『新華日報』1951. 8掲載。)「解放後最初の散文」とされるが、詳細は不明。

IV,

IIIでは詳しく紹介しなかったが、表Iの各類話に共通するプロットは、モチーフを繋ぎ合わせてみると、以下のようになる。

a 男と女が知り合う。— b 女は南詔国王から意に染まぬ結婚を強いられる。または強いられていた。— c 蒼山山中へ出奔する。— d 女、寒さに苦しむ。— e 男、羅荃法師のもつ宝の袈裟を取りに行く。— f 発覚。f'法師と南詔国王の謀議。— g 法師、術を用いる。— h 男、洱海に墜落し、石のロバに変わる。— i 女、待ち続けて死に、雲と化す。

る表現)が様々だが、今はそれぞれの内容や違いを検討する余裕がない。筆者の見ることのできた「望夫雲」類話に関して言えば、第3話に「編者注」とあって、元来、巫師や観音の行為であった事柄が、横暴な国王のそれとして改ざんされていることが分る。「改める必要があるかどうか、検討に値する」という言葉で結ばれているが、原形がたどりにくく、資料としての扱いに戸惑う。

また、言語の問題がある。発表されたものは、未見のものも、すべて漢語いわゆる中国語だと考えられる。話者はペー語で語ったのか、漢語で語ったのか、いずれにしてもどこかでペー語から漢語への転換が行なわれているわけで、それに伴うニュアンスのズレは避けられないだろう。7話も掲載する『雲南民族文学資料』第10集が見られないのは残念だが、見ることのできた資料第1集、第2集から考えても、そう原資料的なものとは考えられない。しかし、厳密な資料の吟味は筆者の手に余るので、今回はあえて深く追求しなかった。李星華女史などは、「整理にあたって、^{はなし}故事の筋、構成、言葉づかい、持ち味はできるだけ忠実を期した。あまり一般的でない方言は使用しなかった。言葉の取捨選択は楊亮才と徐国琼両同志の協力を仰ぎ、できるだけ雲南西部の習慣にあった用語でしかも一般人が見てわかるものにした。」^[14] ということである。

ところで、古い地方誌にも、「望夫雲」に関する二様の記録が残っている。短いものなので、全文を訳出する。

①「精気化雲」(たましい雲に化す)……『重印大理府志』明代

巷に伝わるところでは、昔、ある貧者が蒼山の神から術を授かり、翼が生えて空が飛べるようになった。

ある時、南詔王の宮殿に入り込んで王女を連れ出し、玉局峰にこもって夫婦となった。飲む物食べる物はよく工面して、充分に与えた。それから王女に居心地をたずねると、寒くてたまらないと言う。男は河東の高僧が宝の袈裟をもっているときき空を飛んで取りにいく。このことが僧の知るところとなり、法力で水中に落されてしまう。

女は夫がいつまでたっても帰らないので、悲しみのうちに死ぬ。その精気(たましい)は雲になりゆらゆらと揺れて、ちょうど何かを探しているようだ。この雲が立ち上ると、これに應ずるように洱海に波が起り、大風が吹く。こうなると、船も先へ進めない。人びとはこれを望夫雲とも、無渡雲とも呼ぶ。

②「望夫雲」……『大理県志稿』清末民初

伝説によれば、蒙氏の時(南詔国時代)、ある化け物が宮中の女をさらって行き、玉局峰に住んだ。女の望む食べ物、化け物は絶えることなく与えた。高山のこととて寒いので、女は着る物を欲しがった。化け物がそれをなだめて言うには、河東の高僧のもつ袈裟は、夏は涼しく、冬暖かい。それを取って来よう。そこで、夜、洱海の東、羅荃寺におもむいて、袈裟を盗み出した。これに気づいた僧が呪いをとこなえた。化け物は寺の西の湖に落ち、大きな石に変わった。俗に、石口バと言う。女は待ちくたびれて、悲しみのうちに死んだ。その精気(たましい)が雲となり、望夫雲と名付けられた。毎年冬になってその雲が現われると、大風が荒れ狂う。その有様は、湖の中の石を吹き飛ばさずにはおかないといった勢いである。

この話は、古来また多くの詩人、作家の創作意欲をかきたててきた。参考までに、解放後の主

加えると、今までのところ19話が確認されている。(表I参照)

表I、「望夫雲」類話と所収書

◎筆者既見

民話 番号	書名	出版社	出版年月	類話番号																			
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		
1	民間文学集刊(第一集)	上海文化出版社	1957. 8			◎																	
2	白族民間故事伝説集	人民出版社	1959. 9	◎	◎																		
3	雲南民族民間故事選	雲南人民出版社	1960 1981	◎																			
4	中国民間故事選(二)	人民出版社	1962. 1980. 7		◎																		
5	雲南民族文学資料第10集	作家協会昆明分会 民間文学工作部	1963. 1							○	○	○	○	○	○	○							
6	雲南民間伝説集	雲南大学中文系	1979. 3																○				
7	白族民間故事選	中共大理州・油印	1979. 7 1980. 10	○	○					○	○												
8	雑誌『山茶』	雲南人民出版社	1980. 4															◎					
9	愛情伝説故事選	雲南人民出版社	1981. 1	◎																			
10	中国少数民族文学作品選・第5分冊	上海文芸出版社	1981. 9																◎				
11	白族民間故事	雲南人民出版社	1982. 1						◎														
12	白族民間故事選(故事大系)	上海文芸出版社	1984. 1																◎				
13	雑誌『雲南群衆文芸』	雲南省群衆芸術館	号数不明															○					
備考				李星華・記録整理	李星華・記録整理	郝盛涛・記	楊美清・記録	楊美清・記録	楊美清・記録	李中迪・採集整理	徐嘉瑞・採編	曹自新・李嘉增・整理	鄭嘉賓・記録	杜忠栄・記録	杜忠栄・記録	楊国憲	丁炳森	鄭謙・記録	馬栄康・整理	王寿春・整理	陸家瑞・整理	馬子華・編書	楊慶文・整理

ただし、第4話は「索引」中の題名が「白狐変美女」(白狐美女に変ず)になっており、また第14話は「下関風和望夫雲」(下関の風と望夫雲)で、ここで扱う「望夫雲」の後日譚的内容のものであるから、別の話と考える方が適切かもしれない。第3話は後日譚も一緒になっており、ストーリーも他とやや異なる。後述するように、記録者の手が加えられている。

ところで、中国では、ある種の出版物は一定程度の検討期間を経るまで「内部発行」とされて、一般に広く、(とくに外国には絶対に)公開されないことがある。筆者が1981年夏から83年夏までいた天津でも、『天津風声』という、民話関係の雑誌が出版されていたが、ごく限られた関係者の手許にしか見出すことができなかった。

民話なども、聞き書きがそのまま生の形で出版物に掲載されることはないようだ。たとえば有名なサニ族の叙事詩「アシマ」についても、採集した20種の原話をもとに、発表までかなりの整理が行なわれたことが確認されている。(13) 表Iの備考欄のとおり、処置(もしくはそれに関す

を通過し、地主打倒の火種を播いた。1949年4月には大理盆地にある劍川で武装蜂起がおこり、中国人民解放軍の西南への進軍に合流した。人民政府成立（1949年10月）後は、各県に自治区が設けられ、1956年11月にこれらが統合されて、大理ペー族自治州が成立した。当時、州の人口は260万、半数は漢族で、ペー族は31パーセントにあたる80万人であった。

ペー族の人びとが、一年で最も楽しみにするのは、陰暦3月15日から20日まで、蒼山の麓で開かれる“三月街（いち）”だ。別名の“観音節”からも想像されたとおり、元来は仏教的色彩の濃い、いわゆる縁日のようなものだったらしいが、現在では大理一帯に住む民族の、物資交流・交歓の場となっている。

陰暦6月25日には“火把節（たいまつまつり）”が行なわれる。これはイ語系諸民族に共通の行事で、秋の取り入れを前にした、五穀豊穰予祝の意味が考えられる。民間には、五穀の神跋達とか、南詔国統一の時敗れた鄭賧詔主の妻白節夫人にまつわる由来譚が伝わる。家々には小さな、村の人口には大きなたいまつを立てて、色とりどりの紙旗に縁起の良い言葉を書きつけておく。そして、村人がたいまつをかざして田畑を巡り、虫害を除くのである。これらの行事の今日の情況については、81年3月に筆者らと同行した曾士才氏が、個人的に81年、82年と調査し、報告を行なっている。（『中国民話の会会報』第27号、1983年12月）

また、かつて陰暦4月23日から25日は、聖源寺、河溪城、馬九邑の三霊地を巡り歩く“繞三霊”（三霊地巡り）が行なわれ、若い男女の愛をかわす機会であったと言われる。

ペー族は仏教の伝入する以前から、巫（シャマニズム）信仰であったと考えられる。また“本主”という産土神に対する信仰も厚く、たいてい一村に一本主が祭られている。本主にまつわる伝説から、氏族の祖先との関係、また氏族間関係が知れる。祭られている本主も様々で、もともと原始的なアニミズムや祖先崇拜、英雄崇拜が根底にあるが、時代が下るにつれて、政治的意図の明らかな例もあるようだ。

豊かな自然環境と重層的な精神世界は豊富な民間伝承をもつ。天地開闢に関する神話から、各本主にまつわる話、観音や羅刹の登場する仏教神話、自然現象や風物・習俗・名所古蹟の由来を語る伝説、漢民族と共通する「梁山伯と祝英台」や大工の神様魯班の話、頓智話や笑話など。動物譚は少ないのに、龍に関する話が非常に多いのも特徴だ。本稿で語ろうとする「望夫雲」は、愛情話とも、風物伝説とも、仏教神話とも、分類されうる。

文学創作、科学技術などに関しては、明代に天文や医学方面に秀れた学者が輩出している。すでに散逸したが、ペー族史家による史書も著わされた。現代では詩人や散文作家なども多く、(11)筆者らも昆明で詩人暁雪らと話し合うことができた。

民族的な楽調は“白族調”“打歌”などとして知られ、民間芸能の“吹々腔”“大本曲”についてはすでにIでふれた。

III.

民話の常として、「望夫雲」にも類話が多く存在する。大理州『白族民間故事』編集組による「白族民間故事篇目索引」(以下「索引」と省略。)(12)を参考に、その他筆者の調べ得たものを付け

び、周辺民族からはナマ（那馬……ナシ族）、ルボ（勤墨……リス族）などと呼ばれた。1956年、「ペー族人民の意思に基づいて、正式にペー（白）族という名に決まった。」(6)

人口は113万人（1982年）、ほとんどが雲南省、とくに大理ペー族自治州（1956年11月成立）に住み、また四川省や貴州省にも住む。言語は漢・チベット語族チベット・ビルマ語群イ語系に属す。七、八世紀頃から漢字を用いていた。十世紀頃からは、万葉仮名と同様、漢字音でペー族を表わす「白文」「ペー文字」を用いていたが、明代以後は使われなくなった。

ほとんどが農業に従事し、とくに洱海周辺は気候、土壌とも良く、二毛作が行なわれる。米、小麦、豆類、綿花、油菜、甘蔗、煙草などを栽培その他果物、茶なども産する。川や湖を利用した漁業も盛んで、洱海で採れる“弓魚”はよく知られている。蒼山に産する大理石は、昔から銘を刻むための碑石や建材として利用され、美術工芸品としても世界的に名高い。

蒼山で発掘された遺跡などから、新石器時代にはすでに洱海周辺の山や丘陵に人間が半穴居生活を営み、石斧や石刀を使って農業や漁業を行っていたことが知れる。

漢代には、郡や県の設置に伴って、漢民族の政策的な大量移民が行なわれ、進んだ生産技術や鉄器が洱海の地までもたらされた。(7)一方、唐代までには白蛮とよばれたタイ系民族の白子国ができていて、彼らがペー族の遠祖とも言われる。(8) この間、西北で遊牧生活を行っていたチベット系民族の南下（鳥蛮）や、巴東（四川）にいた同じく氐羌系の爨濮族が巴や楚などの大国に押されて雲南へ流れ込んだ。これらが溶合しあって昆明文化を築き、後の南詔文化の基礎になった。(9)

白子国はやがて鳥蛮の蒙氏による南詔国の支配下に入る。元来六つあった詔（王の意）国の貴族も、それを統合した蒙氏も、後に雲南王に封ぜられたことに見られるように唐の支配系統下にもあったが、吐蕃（チベット系）の後押しで、唐に反抗することも多かった。南詔国は吐蕃風の奴隸制社会で、都を大理城とした。この間、チベット経由でインドから仏教（密教）が入り、その後のペー族の文化に大きな影響を与えた。

次の白蛮系段氏による大理国は300年あまり続き、宋との関係とも深く、文化、科学技術の交流が盛んに行なわれた。

1253年、元（モンゴル族）に統合されると、雲南省が置かれ、大理には大理路と鶴慶路ができた。それは、明代にそれぞれ大理府、鶴慶府として踏襲された。その頃になると「改土帰流」政策（従来の各民族の長による統治、すなわち士官、土司を廃して、中央から派遣した正式の官、すなわち流官に換える。）によって、土着の貴族は権力を失ない、中央集権制が強まった。それに伴って、ペー族の漢化が促がされたことは言うまでもない。

清代にも「改土帰流」政策が引きつがれたが、避地は士官、土司など、土着の勢力が利用された。地主と官僚を兼ねたこれらの勢力は、やがて資本を商業に投下し、インド、ビルマ、ベトナムなどを経て、欧米諸国と取引を行う大商人になる。

こうした事情を背景に、清末には、回族の杜文秀を中心とする各民族連合の反清闘争、その後18年続いた大理政権の樹立をはじめとし、ペー族の村々にできていたキリスト教会の燃き打ちに代表されるような反帝国主義闘争が展開された。

1921年中国共産党成立以後、上海や広州などで革命運動に身を投じたペー族の人もいたらしい。(10)中国共産党紅軍の一万二千余キロに及ぶ長征（1934～1935）の際には、一部がペー族の居住地

れだな。」とうなづきつつ、全体の構成の中では、ペー族らしきを出すための余興であるという感じを免れなかった。とくにその時は、昆明の雲南民族学院で、ペー語の話せないペー族の学生と話し合ったりしたばかりであったので、よけいにその感が強かったのかもしれない。いずれにせよ、具体的なイメージはないまでも、自分が何か非漢族的なものを期待していたのは確かだ。

その後白劇の歴史を調べて、納得がいった。「白劇」という言葉、概念は比較的新しく、解放（1949年）後のものだ。その沿革については、ちょうど私たちの見た白劇「望夫雲」の脚本の作者楊明氏が、何篇かの論文を書いている。一言で言うなら、「白劇」は、ペー族の間に伝わっていた「吹々腔」という芝居に、同じく「大本曲」という語り物芸を取り入れて、1960年代に集大成された民族歌劇なのだ。

「大本曲は」、一人または二人の弦楽器伴奏者がついて、一人で歌うというものであるから、全国的に好まれている「曲芸」(語り物芸)の系統にあると言える。ペー族には、他に一人が三弦による弾き語り、長篇の叙事詩などを語る「本子曲」があるが、「大本曲」はそれが漢民族の語り物芸の影響を受けて、変わってきたものではないかと思う。(3)

一方の「吹々腔」は、清代に滇劇（雲南に住む漢族の劇）の影響を受けて形成されたとも、またそれ以前、元末明初に弋陽腔（江西省弋陽県から起った劇で、伴奏は弦楽器を用いず、笛を中心とする。）系統の劇が雲南に入ってできたとも言われる。弋陽腔説をとれば、すでに五百年の歴史をもつことになる。いずれにせよ、この吹々腔が清の光緒・乾隆年間に非常に盛んだったことは、今も洱海辺のペー族の村に残る野外舞台や、解放後発見された台本、また代々続いた民間芸人の話からも立証されるという。

ちなみに弋陽腔説は、明の洪武年間に元の残余勢力の討伐が行なわれた時、またその後の駐屯兵や大規模な移民に伴って流れ込んだ可能性を説く。弋陽腔は元末明初に江西弋陽で起り、明の嘉靖年間には、北京、南京、湖南、福建、広東など広く流行していたという。雲南への移民は浙江、南京あたりの人間が多かったらしい。(4)

ともあれ、白劇の成り立ちは、「思ったより漢族的」という私の「望夫雲」観劇後の感想が当然であったことを説明する一方、「漢族にとっての少数民族」という点をあいまいにした、幾分センチメンタリズムを含んだ私の中国少数民族観を、足元から突き崩していく。今回はその領域までは踏み込む余裕がないので、ただ以来私の心の中に棚引きつつけている「望夫雲」民話の周辺を探ってみたい。

II.

ペー族はかつて南詔国（783～902）、大理国（937～1253）を荷なった歴史と、「雲南へ南下してきたチベット系騎馬牧畜民文化と、雲南に古くから住みついていたタイ系水稻耕作民文化とが、大理盆地での長い定着生活の間に融合し、さらにこれに漢文化が加わった複合文化」(5)をもつ。主な居住地である大理盆地は、いわゆる照葉樹林文化圏の中心に位置し、近年、日本民族文化の起源を考える際、何かと取り沙汰されるのである。

自称はペーツ（白子）とかページ（白尼）であるが、かつて漢民族は「民家」（ミンチャ）と呼

「望夫雲」考

—— 雲南ペー族の一民話をめぐって ——

池上貞子

I

1981年3月筆者は「中国民話の会雲南参観団」の一員として、当時まだ一般的には外国人に開放されていなかった中国雲南省大理白（ペー）族自治州を訪れた。俗に「大理三月風光好（佳し）(1)と歌われるのは、陰暦のことかもしれないが、私たちの訪問もけっして早すぎはしなかった。蒼山を背に洱海を抱いて広がる大理盆地には、蚕豆（そらまめ）が豊かに実り、畔道には野の花が咲き競っていた。洱海を渡る風は柔かな清々しさを運び、えも言われぬほど頼に快い。

大理には四泊して、現地の民間文学工作者と座談会を開いたり、ペー族の村や古蹟、大理石工場などを見学した。また、夜、郊外の温泉へ出かけたりしたのも、貴重な体験であった。

こうした日程の中で、ある晩、大理白族自治州白劇団による、白劇「望夫雲」を見る機会をえた。話は次のようなものであった。

南詔国の王女阿鳳（アーフォン）は、散歩の途中で出会った若い狩人阿龍（アーロン）を慕うようになるが、父王に意に染まぬ結婚を強いられ、後宮の奥深くに閉じ込められる。一方、アーロンは天女の助けで自由に空を飛べる翼を得、王女を誘い出す。二人は蒼山山中に隠れ住むが、やがて父王の知るところとなり、王は羅荃法師に助力を要請する。冬になり、山中の王女は寒さに耐えきれない。狩人が宝の衣を得に山を下りたところ、羅荃法師の術にはまり、洱海に叩き落される。そして、湖（洱海）の底で、石のロバに変わる。一人残された王女は死に、一条の雲となって、あたかも夫の帰りを待つかのように、蒼山の頂上に立ちのぼる。蒼山風（おろし）が激しく吹くと、洱海の水が吹き上げられ、湖底に沈んだ夫の姿、すなわち石ロバが望めるのであった。(2)

もともと私は中国の少数民族でも北方の方に係っていたので、ペー族の文化に対して、あまり知識をもちあわせていなかった。観劇以前に、諸々の座談会で紹介されたペー族の民間文芸についても、理解したと言えるほど、自分の中で消化されていたとは思えない。ただ、雄大で優美なこの話が、ペー族の間に古くから伝わる民話を基にしていることぐらいの知識はあった。

劇を見終わって、まず頭に浮かんだのは、「京劇に似ている、漢族のものと変わらない。」ということであった。また劇中演じられた「繞三壺」という舞蹈劇も、「これが座談会で紹介されたあ